

つくばみらい市ワープ周辺地区の提案

交景

建築設計デザイン学科3年
松永健太

問題への意識

みらい市のワープステーション周辺は、駅から少し離れると広大な畑や森林が広がり、都市と農村が交差する独特の風景を持つ地域である。近年、つくばエクスプレスの開通と共に駅周辺には急速に新しい住宅や商業施設が立ち並び、都市的な景観が形成されてきた。一方で、駅から少し離れた郊外には、昔ながらの農村風景や長屋の住宅街が残り、旧来の住民が今も日常を紡いでいる。このような都市と郊外、新住民と旧住民といった「対比」つくばが、この地域に独特な空気感と課題を同時にもたらしている。

旧住民は長年この地に暮らし、土地に対する愛着や地域の将来に対する想いを静かに抱えている。一方、新住民は東京へのアクセスや住宅コストの利点からつくばみらい市を選び、生活の基盤としての便利さを求めている。そのため、地域への帰属意識やまちづくりへの関心には温度差が生まれており、まちの一体感を育むうえで無意識の差が存在しているように見える。

コミュニティのデザイン

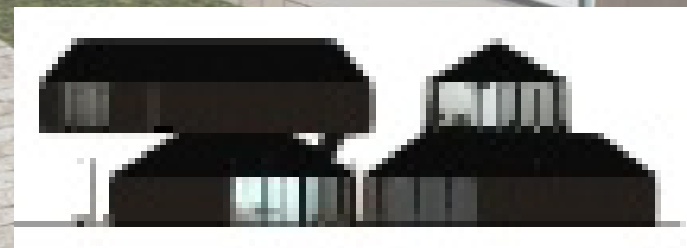
建築の構成には、デフォルメした家のかたちをモチーフとして採用し、それを様々に配置することで、不思議さや親しみ、そして街並みのような安心感を共存させている。住戸の合間や共有スペースは、子どもが遊び、住民同士が自然と顔を合わせる場所となり、世代を越えた交流のきっかけを生む。さらに、芝生、植栽などを取り入れ、周囲の自然と調和する風景をつくり出す。これらの空間は、地域に暮らす人々の生活のリズムを緩やかにつなぎ、暮らしとまちを結びつけるコミュニティの核となることを目指している。

ゾーニング

今回の計画では住居と施設を組み合わせたユニットとして複雑な配置の中にまとまりをもたせた。種類別にエリアを分け、初めて訪れる方がこの空間を満喫できる導線計画とした。店と書いてあるエリアには、店舗を構えたい方とその住居の組み合わせになっている。また、建築間を繋がる場となる空間になるよう計画した。



店舗立面



図面説明

各棟同士のつながり

施設が並んでいると同時に、住居も隣接している。
住居間のスペースでは家族で遊んでいる姿や、散歩がてら外に出た夫婦が顔を合わせ、小さなコミュニケーションの場となる。

1階住居の配置

隣居とのコミュニケーションが生まれる距離を考慮し配置した。
また、ゲストハウスを設け、こちらに住んでみたい方、寝泊りに困った方等に利用していただける。



食堂

カフェでコーヒーを買った後や、ちょっとした休憩、パーティールームで作った料理を持ってきてなど、様々な用途として機能。隣人同士での食事などにもってこい。



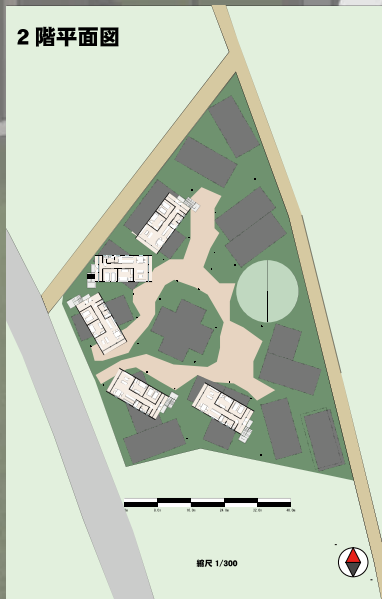
店舗1 カフェ

店舗を構えてみたい方向けの施設としてカフェを例とさせていただく。
この集合住宅に住んでいない方でも立ち寄れるような空間にするために正面にこのような店舗を配置し、施設群に興味を向けさせる。



2階の住居説明

2階には1階が施設になっている棟の住居として配置している。



今回の提案では、駅周辺の都市的な風景と、郊外に広がる農地や集落の風景が交錯する、つくばみらい市ワープステーション周辺地区において、集合住宅に求められる役割を再定義した。ここで求められるのは、単なる住居機能の集積ではなく、「未来を自ら創るまち」という理念を、日常の風景として体験するコミュニティの場である。

本提案では、家のかたちを抽象化した建築を複数積層・配置し、それらを周囲の自然や敷地条件と呼応させることで、親しみやすさと新しさが同時に表れる集合住宅を構成した。都市と農村、新旧住民といった異なる要素が並び立つこの地域において、建築そのものが両者をつなぐ媒介となることを意図している。

また、住戸だけでなく、食堂や浴場、集会所、住居と住居の間にあったフリースペースを建築内部や住棟間に点在させることで、人が自然と集まり、自然に出会いが生まれる空間構成とした。住民同士の日常的なすれ違いや、外部から訪れる人との関わりが重なり合い、緩やかな関係性が育まれていく。

建築は、現代的な構造や素材を用いながらも、長屋のような距離感や、地域に根付いた暮らしの記憶を内包する存在として計画した。新しさの中に懐かしさを織り込み、この場所ならではの風景を形成していく。

そして、今回の提案は、ワープステーション周辺地区としてのものであったが、この集合住宅がここだけで完結せず、他のエリアでも広がっていき、様々な場所でつながりが生まれる機会を生み出すことを期待している。

最後に、新旧住民の違いを越え、「同じ未来に向かって生きている」ことを空間の中で共有できる集合住宅として、本提案は、つくばみらい市の新たな風景を担うものである。これからのつくばみらい市では、人々が全体でまちづくりに関与してほしい。

違いの交差、次の風景